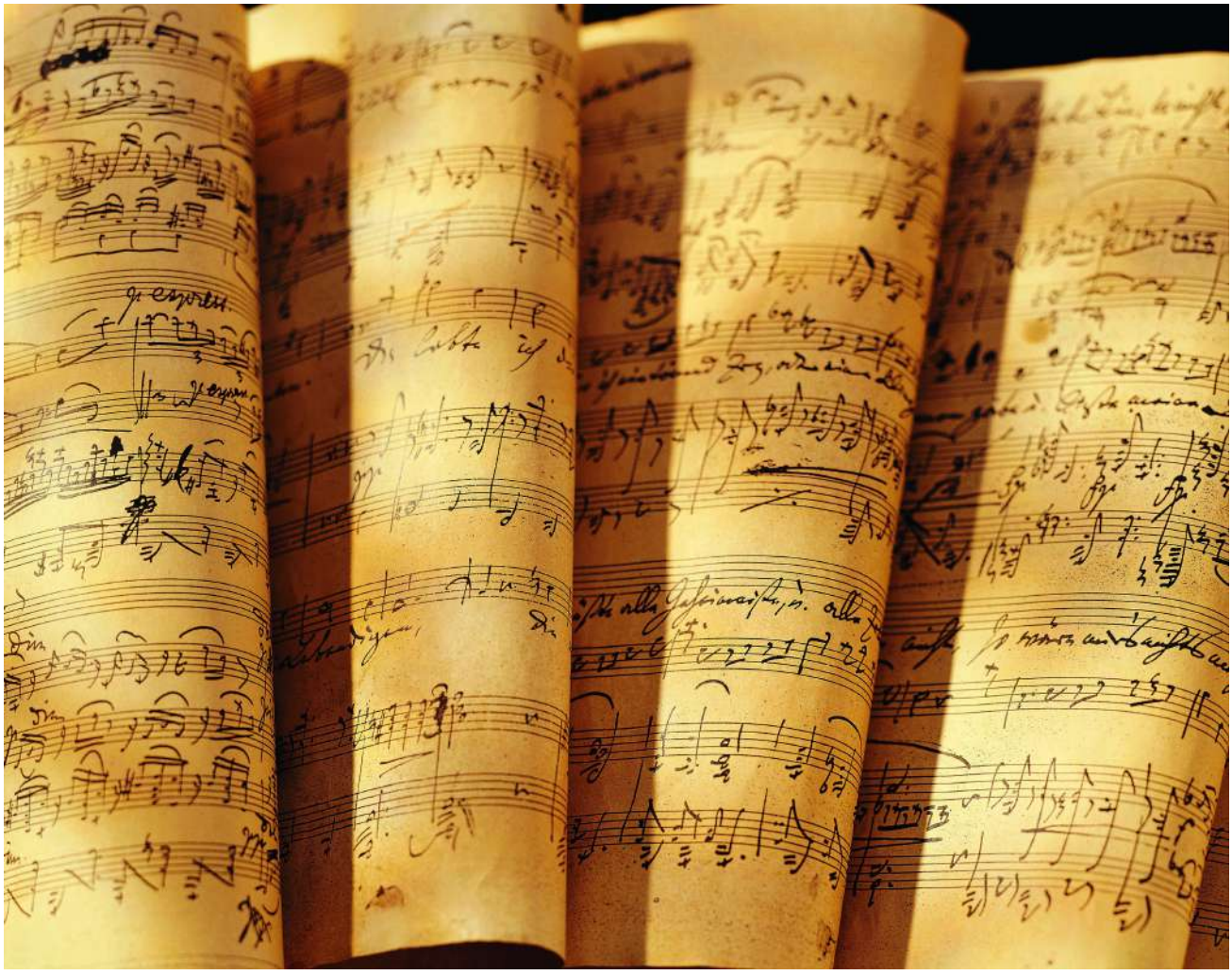
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 49

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

961. 夢がもたらした治癒と変容

962. 五月の国際学会と「タレントアセスメント」のコース

963. ある古書店での一冊の書物との出会い

964. 季節の変化と静寂

965. 古書店の店主に教えてもらった音楽配信サービス

966. 書くことと読むことの山脈の往来

967. 初校の修正とマウリツィオ・ポリーニのベートーヴェンピアノソナタ

968. 自己偽装と発達測定

969. 自己偽装と環境適応能力

970. 初校の再読

971. 初校の修正を終えて

972. 対象からの脱却と接近

973. 音楽との向き合い方について

974. 日記が持つ秘術と顕術

975. 全体美と建築美

976. 初めての作曲体験を通じて

977. 感覚の鋭敏化と脳の再構成をもたらす作曲

978. 楽曲に潜む反復と差異

979. 自己としてのベートーヴェン

980. 第二弾の書籍に持たせた一つの役割：日本で普及しつつある「意識の発達理論」の盲点と幻想

© YOHEI KATO 2018

961. 夢がもたらした治癒と変容

昨日も論文を書きに書き、文章を執筆し続ける一日であった。こうした日々が常態化しつつある。それに伴い、文章を書くことに求められる内的な筋力が鍛錬されていることを実感する。一方で、精神的な筋力を鍛えるためには、物理的な身体の鍛錬と調整が不可欠である。そのようなことを改めて考えさせられたのが、昨夜の夢であった。

昨夜の夢から得た啓示は、身体と精神を等しく鍛え上げていくことの重要性であり、同時に、両者を治癒・調整することの大切さである。昨夜の夢の中で、私はエネルギーワークを受けていた。このエネルギーワークは、身体に直接触れるマッサージのようなものであり、私は施術者が提供するワークの最中、自分の身体感覚がなくなるほどに、意識が身体そのものと同一化していた。

あまりの心地よさに私は、夢の中でさらに一段深い夢の世界に入り込んでしまうかのようであった。しばらく意識と身体が完全に合一するという心地よさに浸った後、再び意識と身体が分離された。つまり、自分の意識を持って身体を客体化し、身体の中で起こっていることが意識を通じて理解できるようになったのだ。そのため、それは意識と身体の再分離ではなく、統合と呼んだ方がいいのかもしれない。

さらに、そこで極めて不思議な体験をした。このエネルギーワークの前後を比較すると、明らかに自分の身体と身体感覚が変容を遂げていることがわかったのだ。もはやワークを受ける前の身体はそこに存在せず、ましてや以前の身体感覚も存在していない。そこに存在していたのは、新たな身体と新たな身体感覚であった。

それはまるで、自分の身体と身体感覚が生まれ変わったかのようであった。新たに獲得された身体は、これまで以上に滑らかかつ力強い動きを可能にし、新たに獲得された身体感覚は、内側のごくわずかの機微も逃さず捉えることを可能にするようなものであった。

ワークの最後に、施術者の方から自分の身体に関する助言を受け、一つの身体運動を勧めてもらった。その方曰く、何やら胸から肩にかけての身体エネルギーが滞っており、そこに閉鎖的なエネルギーが流れているがゆえに、開放感を持って外界と接することができていないということであった。

© YOHEI KATO 2018

この発言を聞いた時、妙に思い当たる節があったので、夢の中の私は非常に驚いていた。偶然にも、私が米国の大学院に留学していた際に、身体エネルギーに造詣の深い友人から、私のエネルギーは、通称「第三の眼」と呼ばれる箇所と頭のてっぺんにある「百会」に集中しており、胸のあたりにエネルギーの閉塞が見られる、という指摘を受けていた。

その課題が今ようやく解決の方向に動き始めたように思う。夢というのは、私たちの内側と外側の問題について実に洞察に溢れた啓示をもたらす。昨夜見た夢は、まさに私の身体や身体感覚、そしてそれらを通じて私がどのようにこの世界と関わっていくかに関する既存の課題を解決に向かわせるものだったのだ。ワークの最後に勧めてもらった簡単な身体動作を、ぜひとも今後の生活の中に取り入れていきたいと思う。

夢から目覚めた私の身体は、確かに生まれ変わったかのようであった。私の身体と身体意識は、夢によって治癒と変容がもたらされた。変容後の身体と身体意識を持って、今日から全てを新たにする気持ちで日々の仕事に取り組みたいと思う。2017/4/20

962. 五月の国際学会と「タレントアセスメント」のコース

今日は朝一番に、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生のオフィスに足を運んだ。今日は論文に関する指導を受けに行ったわけではなく、五月の中旬にフローニンゲンで開催される、アイデンティティの発達に関する国際学会に関する打ち合わせをするために先生のオフィスを訪れた。

今回私は、この学会の運営にボランティアとして携わることにした。もし仮に私がアイデンティティの発達について現在何か研究を行っていれば、ぜひとも今回の学会で発表したいところだが、あいにく発表できる研究がないので、今回は運営に携わる形で学会に参加することにした。

クネン先生曰く、この学会は、アイデンティティの発達に関して歴史のある国際学会ということであり、これまでは常に米国で開催されていたそうだ。しかし、近年この学会に参加する研究者のほとんどがアメリカ人やカナダ人ばかりになってきたそうであり、北米以外の国の研究者に参加を促すために、今回初めて北米以外の国で開催することになったそうだ。

そこで白羽の矢が立ったのが、この学会の主要メンバーであり、なおかつ、アイデンティティの発達に関して優れた研究を残しているクネン先生がいるフローニンゲン大学だった。今日はその学会の準備に関する打ち合わせを、秘書や他のボランティアメンバーを含め、クネン先生と行っていた。

ここ最近は参加者の数が30名から40名ほどだったそうなのだが、今回は100名近い研究者が学会に参加するとのことだ。初の欧州での開催ということもあり、この学会が盛況に終わるように積極的に関与していきたいと思う。

学会の打ち合わせが終了後、図書館で一時間ほど論文を読み、「タレントアセスメント」のコースが行われるキャンパスに向かって出発した。図書館で論文を読んでいる最中にも思ったのだが、このコースは、今の私にとって非常に重要な意味を持っている。このコースで扱われる内容は、心理統計学に関する理論的かつ実践的なものである。このコースは、私が新たらしい発達測定手法を開発する際に不可欠となる概念や理論を学び直すことにつながり、なおかつそれらの知識を実践的に習得するための役割を果たすだろう。

これまで私は、発達測定手法をあくまでも発達心理学の枠組みから捉え、何らかの測定手法を開発・適用する際にも、発達心理学の観点に立脚していた。しかしながら、新たな測定手法を開発する際、そしてそれらを企業社会や教育の領域に導入する際に、心理統計学の理論的な知識と実践的な知識の両方が不可欠だと感じるようになっていた。そうした課題意識とまさに合致したのが今回の「タレントアセスメント」というコースであった。今日から始まった当該コースを通じて、知性や能力を測定することに関する理論的・技術的・倫理的な側面について理解をより深いものにしていきたいと思う。2017/4/20

963. ある古書店での一冊の書物との出会い

昨夜の夢が私の身体と精神を治癒したためか、今日は心身ともに非常に調子が良かった。「タレントアセスメント」のコースに参加するためにキャンパスに向かって歩いている最中、常に気分が高揚していた。

もうすぐ五月に入るのだが、マフラーを巻き、手袋をはめながらフローニンゲンの街を歩いていても、その寒さが気にならないほどに気分が清々しかった。ここ最近毎朝、モーツァルトの交響曲を一時

間ほど聴き、その後にベートーヴェンの交響曲を聴くような習慣になっている。フローニンゲンの街を歩いている時の私の内側には、二つの交響曲が美しく折り重なって流れているような感覚があった。飛び跳ねながら街を歩きたい気分であったが、そうした衝動を抑えつつ、いつもと変わらずに、人間の発達現象全般に関する考え事をしながら歩いていた。

「タレントアセスメント」のクラスが終了後、私はその足で、珍しく昼食を外で摂った。おそらく最後に日本以外の国でラーメンを食べたのは、サンフランシスコのジャパンタウンであったから、およそ四年ぶりに海外でラーメンを食べた。

今回足を運んだのは、街の中心部にあるアジア料理店であり、インドネシア人の友人であるタタにこの店について以前話を聞いていた。実際にこの店で売りにしているラーメンを食べてみると、非常に美味しかった。注文したラーメンを完食した後に、ラーメン好きのオランダ人の友人であるピーターにこの店についてすかさず連絡をしておいた。何年後になるかわからないが、ラーメンという食べ物をまたどこかの国で食べてみたいと思う。

昼食を済ませると、街の古書店に足を運んだ。この古書店に足を運んだ目的は、音楽関係の書籍と哲学書で何か良いものがあれば購入するためであった。特に、一番の目当ては、ベートーヴェンのピアノソナタに関する解釈書であった。以前の日記に書き留めていたように、修士論文がほぼ完成の目処が立ち、新たな研究テーマを二、三立て、それらについて論文を執筆していこうと思っている。

それらのテーマのうちの一つが、ベートーヴェンのピアノソナタの非線形的発達過程を研究するものである。大きな構想としては、ベートーヴェンの全生涯を眺め、彼の精神的な発達過程と楽曲の発達過程を比較対応させる形で研究したいと思っている。今回の研究はそうした大掛かりな研究に取り組むための前段階のものである。

先日走り書きしたメモを見返してみると、最終的には、ベートーヴェンに関して少なくとも五本ほどの論文を執筆したいと思っており、小さなものから順番に列挙すると、「ベートーヴェンのピアノソナタ第1番の非線形的発達過程」、「ベートーヴェンの活動初期のピアノソナタの発達過程」、「ベートーヴェンの活動中期と後期におけるピアノソナタの発達過程と構造的比較」、「ベートーヴェンのピア

© YOHEI KATO 2018

ノソナタ全32曲の発達過程」、「ベートーヴェンの精神的（思想的）発達過程とピアノソナタの発達過程の比較」を考えている。

これらは完全に私の純粋な関心から行われる研究であり、所属している大学院で要求されているような研究ではない。これまで培ってきたダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法、そして発達心理学に関する知見を活用しながら、ベートーヴェンの精神的発達過程と彼が残した楽曲の構造的な発達を追いかけてみたいと思うようになった。

こうした探究に私を引き寄せたのは、ウィーンでベートーヴェンが歩いていた道を実際に自分で歩き、彼が見ていた景色を実際に自分の目を通じて眺め、彼が生きていた場所に私が訪れたことと大きな関係があるだろう。

今の私の内側では、ベートーヴェンの存在が大きな位置を占めており、もはや見て見ぬ振りをして日々の生活を営めなくなってしまっている。とにかく私は、ベートーヴェンの精神の発達過程と彼の精神の表れである楽曲の発達過程を辿りながら、ベートーヴェンの存在を深く理解し、そこから転じて自分の内側をさらに深く理解したいという思いに至ったのだ。

その第一歩が、今回の研究である。この研究を進めるための参考文献として、近くの古書店を訪れた。街の中心部にあるフローニンゲン大学のメインキャンパスの近くにあるこの古書店は、私のお気に入りの場所である。店内には、荘厳かつ壮麗なクラッシク音楽がいつも流れており、古書を吟味するのにこれほどふさわしい環境はないと常に思う。

店長も音楽好きな気さくな方であり、頻繁にこの古書店を訪れるわけではないが、ここに訪れる時は店長と少しばかり会話をするのが楽しみの一つだ。今日は、音楽関連のコーナーに真っ先に行き、オランダ語やドイツ語、そしてフランス語の古書を泣く泣く脇にどかしながら、“The Language of Music (1959)”という古書を発掘することができた。

結局、哲学書を含め、三時間弱この古書店の中で様々な古書を吟味した挙句、購入したのはその一冊のみであった。この古書には、今の私に必要なものが凝縮されていることが感じ取られた。

© YOHEI KATO 2018

残念ながら、お目当てにしていたベートーヴェンのピアノソナタに関する英語の解釈書を見つけることができなかったが、購入したその一冊の書物と出会うことができたことに対する幸福感の方が強かった。古書店から自宅に戻る私の内側では、今朝と同様に躍動感に満ちが音楽が流れていた。2017/4/20

【追記】

上記の日記で言及した古書店にここ最近足を運んでいないことに気づく。店長のセオとは顔見知りであり、前回訪れた時には音楽に関して色々な話をしてもらった。ブダペストのオルガンコンサートに参加して以降、フローニンゲンの街のシンボルであるマルティニ教会のオルガンコンサートに参加したいという思いが強くなっていたため、セオにこのコンサートについて話を伺ってみようと思う。

また、久しぶりに古書店を訪れることによって、新たな書物との出会いがそこで待っているように思う。前回訪れた時と比べて自分の中で何かが深まっていれば、きっと新たな書物とそこで出会うだろう。近々セオが経営する古書店に足を運びたい。フローニンゲン：2018/5/9（水）08:49

964. 季節の変化と静寂

昨日、毎日の夕食で食べているトマトを切らしてしまったので、近所のスーパーで買い足した。普段と同じように、夕食時にトマトを食べようと思って冷蔵庫から取り出す。

これまで購入していたトマトと同じように、全く同じ生産者のオーガニックのトマトを昨日も購入していたのだが、冷蔵庫から取り出したトマトの輝きがこれまでと異なっていることに気づいた。春のトマトというのは、こうも赤く美しいものなのだろうか、と思わずにいられなかった。

少しばかりトマトの輝きに見とれていた。そして実際にそのトマトを食べてみると、トマトの果肉もこれまでの季節のものとは比べものにならないほどの肉感があった。季節によってこれほどまでに姿形、そして果肉の質感が異なることに純粋な驚きがあった。

食卓の窓から景色を眺めると、日没時間が遅くなり、まだ夕方のような雰囲気が漂っていた。太陽も依然として輝いていた。そのような中で、一つのトマトがもたらした小さな感動に私は浸っていた。人間もトマトと同じである、そのようなことをふと思った。

© YOHEI KATO 2018

季節の移り変わりに応じて、私たち人間も質を異にするのである。ここで述べている季節とは、外界の季節のことを指しているわけではない。内側の季節のことだ。内側の季節が変化するのに応じて、私たちの内側の輝き、そして果肉のような質感が変化するのである。これはやはりとても興味深い現象だ。

夕食を摂っている最中、私を取り巻く外部環境の静けさと内側の静けさが一層存在感を増しているように思えた。ウィーンのアルベルティーナ美術館で見た、エドゥアルド・アンジェリーという画家の作品が突如として脳裏に浮かんだ。あの時、彼の作品が私にもたらした印象を今も忘れることができない。

アンジェリーが産み出した一連の作品が置かれたエキシビジョンの空間は、美術館の他の空間とまるっきり質を異にしていた。そこだけが別世界だったのだ。別世界を創出していたのが、まさに彼の作品のテーマである静寂さだった。絵画から静寂さが溢れ出し、空間そのものに静寂さが溶け込んでいたのである。それが私を別世界に連れて行ってくれたのだと思う。

もはやそれは有無を言わせぬものであったがゆえに、別世界に連れて行ってくれるというよりも、連れて行かれた、と表現できるような力が存在していたと述べた方がいいだろう。静寂さには何か得体の知れないものが潜んでいるようだ。

静寂さの中には、私たちを真に目覚めさせる何かが存在しているのだ。外側と内側の静けさを大切に日々を生きたいと改めて思う。2017/4/21

965. 古書店の店主に教えてもらった音楽配信サービス

今日は午前中に、「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースで取り上げられている論文を順番に読み進めていった。先日初回のクラスが行われたところだが、全七回に渡るクラスの課題論文を全て読み通すことができた。あくまでもこれは一読目であり、これからクラスの進行に応じて、二読、三読と繰り返し読んでいく必要がある。今週の土日は少し天候が崩れるようなので、昼食前にランニングに出かけた。

© YOHEI KATO 2018

今日も冴えない天気ではあったが、論文を計画通りに読み終えた充実感からか、ランニングの足取りは実に軽快であった。ランニングから帰宅し、昨日訪れた古書店の店主に教えてもらった音楽配信サービス「Spotify」を試しに活用してみることにした。

当初はアマゾンの音楽配信サービスを選ぶべきかSpotifyを選ぶべきか迷ったが、結局、店主との縁もあってSpotifyを選ぶことにした。そもそも音楽配信サービスを活用しようと思ったのは、昨日、古書店に立ち寄る前に街の音楽屋で発見したCDの購入を迷っていたことがきっかけである。

その音楽屋に、アルフレッド・ブレンデル、マウリツィオ・ポリーニ、ヴィルヘルム・ケンプという偉大なピアニストが残したベートーヴェンピアノソナタ全集のCDが置かれており、是非ともそれら全てを比較して聴きたいと思っていた。しかし、論文や書籍以外のものを自宅に増やすわけには行かず、またCDの場合、劣化の恐れがあるため、その場で即座に購入することを控えていた。そしてその足で訪れた古書店で、偶然にも店主からその音楽配信サービスを教えてもらったのだ。

先ほど、このサービスを提供するウェブサイトから登録を済ませ、早速それら三人のベートーヴェンピアノソナタ全集を調べてみると、全て聴くことができた。無料版だと曲と曲の間に広告が入るため、広告が入らず、なおかつ無料版よりも音質の良い音を提供してくれる有料版にすぐさま切り替えた。

Spotifyはクラシックのみならず、合計で4000万曲ほどの音楽を配信しているため、私の音楽生活をより豊かにしてくれるだろうと期待している。時間を作りながら、これまで購入したいと思っていた様々なピアノ曲や交響曲が収められたCDをこのサイトを通じてゆっくり聴きたいと思う。

昨日、古書店で“The Language of Music (1959)”を購入した際に、実はもう一冊ほど気になっていた古書があった。それは、発達心理学に多大な功績を残したジャン・ピアジェの後期の書籍“Structuralism (1968)” である。特にフローニンゲンでの三年目は、再び発達心理学の古典を読むことを一つの課題としており、是非ともピアジェの仕事にも再度関心の目を向けたいと思っていた。

これまでの私は、ピアジェが残した数々の論文が収められた“The Essential Piaget (1977)”という書籍を中心に読んでいた。帰宅して再度その書籍の目次を眺めると、“Structuralism (1968)” の書籍の中に収められている論文の幾つかが、その論文選集の中に収められていないことに気づいた。

© YOHEI KATO 2018

そのため、来週にでもこの古書を買いに再び古書店を訪れ、Spotifyを勧めてくれた店主にお礼を述べようと思う。

その店主の年齢は七十歳ぐらいだろうか、しかし、年齢を一切感じさせないほどエネルギーに満ちている。それはもしかすると、古書店でいつも鳴り響かせている音楽の力によるものなのかもしれないと思った。2017/4/21

966. 書くことと読むことの山脈の往来

ザルツブルグに滞在中、記念館や博物館を通じて、過去の偉大な音楽家たちの業績を辿っていた時に、インプットの量が脆弱であれば、ある時からアウトプットの量が必ず枯渇するのではないかということに気づかされた。モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト等、彼らにまつわる資料を直接この目にした時、彼らが大量の楽曲を創出し続けることができたのは、絶えず音楽の探究を通じて得られた新たなインプットがあったからに違いないと思うようになった。

今日は午前中から昼食後にかけて、「成人発達とキャリアディベロップメント」と「タレントアセスメント」のコースで取り上げられている論文を読み進めていった。明日のうちに、いくつか論文を読み進めることができれば、比較的短時間で合計50本ほどの論文を読み終えたことになる。

昼食後から、「複雑性とタレントディベロップメント」の協働論文の修正を完成させることができた。これを持って、二つの協働論文の執筆が終了し、一昨日の段階で修士論文の方もひと段落ついたので、今日から数日間は論文の執筆に追われることはなくなる。そのため、その期間に自分の内発的な動機に従って、旺盛な読書を行いたい。この期間を逃してしまうと六月の中旬を待たなければ、純粋な動機だけに従って読書をじっくり行う時間が取れなさそうなのだ。というのも、数日後から、最終学期に履修している二つのコースの論文を執筆していくことになり、それらのコースが終了するのが六月の中旬だからだ。

今日の夕方から、非線形ダイナミクスに関する論文を一つほど読んだ。その論文を読みながら、ザルツブルグでの国際学会で大変お世話になったステファン・グアステロ教授が執筆した書籍の中で、まだ読んでいないものについて強い関心が立ち現れた。

グアステロ教授が執筆した書籍の中で、これまで読んできたのは、“Chaos and Complexity in Psychology (2009)”と“Nonlinear Dynamical Systems Analysis for the Behavioral Sciences Using Rael Data (2011)”の二冊である。どちらも、ダイナミックシステム理論と非線形ダイナミクスに関する専門書であり、それらの領域と心理学を架橋する試みに従事している研究者にとって必須の二冊だろう。ただし、それらの二冊は、グアステロ教授が編集者として関わり、彼の論文が収められているのはいくつかの章だけである。

学会を契機として、グアステロ教授とやり取りをさせていただくまで、彼の仕事に深く注意を払ってきたわけではなかった。学会の休憩中等を含め、グアステロ教授と会話をすることによって、彼の人柄と専門性に惹かれるものがあり、より深くグアステロ教授の仕事を理解したいと思うようになった。そうしたこともあり、今日の夜に、グアステロ教授の単著“Chaos, Catastrophe, and Human Affairs: Applications of Nonlinear Dynamics to Work, Organizations, and Social Evolution (1995)”と“Managing Emergent Phenomena: Nonlinear Dynamics in Work Organizations (2002)”を購入した。

私がグアステロ教授のことを尊敬しているのは、何もダイナミックシステム理論と非線形ダイナミクスに関する専門性の高さやそれらを活用した研究だけにあるのではない。私が特に共感を持つのは、彼の関心領域の一つに、ダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスの研究を組織開発やリーダーシップ開発などの実務分野に積極的に応用していることだ。その他にも、チームダイナミクスや組織内でのパフォーマンスやモチベーションの非線形的発達現象に関する応用研究とその成果を実務的なコンサルティング活動につなげている。それらの点は、私も絶えず視野に入れていたことであった。

注文した二冊の書籍が届くまでにはもうしばらく時間がかかるため、腰を据えて読むのはもしかしたら六月を迎えてからかもしれない。とりあえずこの数日間は、再度フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”とベートーヴェンのピアノソナタの解釈書を読み進めたいと思う。

© YOHEI KATO 2018

毎日があたかも、大量に書くことと大量に読むことの二つの山の頂点を行き来するような日々である。両者の間に谷はなく、二つの山の往来がさらに高い山脈を築き上げていく。私はその往来を見守り、実際に山々を歩く主体に過ぎない。2017/4/21

967. 初校の修正とマウリツィオ・ポリーニのベートーヴェンピアノソナタ

今朝は五時半に起床し、外側の曇り空の景色とは異なり、内側の景色は晴れ渡っていた。起床直後、今日という一日の中で進行させることのできる仕事に対して強い期待感と興奮があった。文章を読み、文書を書くために今朝目覚めたのだ、と言わんばかりの気持ちであった。

いつも通り、朝の習慣的な実践を行い、お茶を入れたところで日記を綴り始めた。その際に、昨日契約した音楽配信サービスのSpotifyを活用して、クラシック音楽をかけることにした。基本的には、自分が聴きたいと思う曲をあらかじめ決めておき、そうした曲をかけるためにこのサービスを活用している。だが、今朝は少し探索的な意味も含めて、パソコンの画面上に表示されたお勧めの曲を聴いてみることにした。流れてきた交響曲は、残念ながらその瞬間の自分の感情や感覚と合致しておらず、結局自分の意思で曲を選んだ。

昨日は、10時間にわたってヴィルヘルム・ケンプが演奏するベートーヴェンのピアノソナタ全集を聴いていた。それとの比較の意味も込めて、今日は早朝から、マウリツィオ・ポリーニが演奏するベートーヴェンのピアノソナタ全集を聴くことにした。

ポリーニについて調べてみると、ピアノの演奏のみならず、キャリアの初期の段階でミラノ大学で物理学を学んでいたことが興味深く映った。ポリーニの過去の評判を眺めてみると、その超絶技巧に賛辞を送る声と機械的であるという批判的な声の双方がある。どちらの声も総合してみると、ポリーニの演奏には物理学的な正確性や完全性が滲み出ているように思える。緻密さが生み出す格調高さを好む傾向のある私にとって、ポリーニの演奏は望ましいものかもしれない。それを自分で確かめるために、朝一番から10時間にわたるピアノソナタ全集を聴くことにした。

今日は午前中の早い段階で、「タレントアセスメント」のコースで取り上げられている論文を六本ほど読み終えたいと思う。六つの論文はどれも、認知的な能力と非認知的な能力を測定することに関するものである。これまで私が発達測定を行う時にせよ、新たな測定手法を開発する時にせよ、そこで

の焦点はもっぱら認知的な能力にあった。そのため、非認知的な能力を測定するという観点は自分の中では新しい。これまでの仕事と対比させる形で、非認知的な能力の測定に関する理解を深めたいと思う。六本の論文を読み終えるのは、九時前あたりだろうか。

九時をめどに、そこから今日という一日をかけて、第二弾の書籍の初校を最初から最後まで読み返したい。幸いにも、大きな追加・修正をする必要はもはやないので、今日行うべきことは、誤字・脱字を逃さずに捉えていくという細かな作業だ。この作業が非常に細かいものであることを思うと、早朝にポリーニのピアノ曲を選んだことは偶然ではないのかもしれない。正確性と緻密性が要求される仕事を行う際に、超絶技巧と機械的という対極的な評価を得たポリーニの演奏はとても親和性があるように思う。ポリーニが演奏する10時間にわたるベートーヴェンのピアノソナタの全曲が終了するまでに、初校を全て読了することができれば幸いだ。2017/4/22

968. 自己偽装と発達測定

早朝から書斎の中では、マウリツィオ・ポリーニが演奏するベートーヴェンのピアノソナタが清らかな小川のように流れ続けている。私は音楽に関しては門外漢であり、楽譜に記載されている音符すらも読めないが、絶えず自分の内側には音楽的な何かで満たされていることに気づく。

ピアノの演奏などできないにもかかわらず、自分の感覚に合致するピアノ曲を聴く時は、頭の中に鍵盤が浮かび上がり、鍵盤の一つ一つが曲の流れに応じて光るような現象を内側に知覚することがよくある。

なんとか明日の午後は時間を取り、作曲の学習と実践に時間を充てたいと思う。内側の音楽を形にする日が一刻も早く訪れることを願う。

今日は「タレントアセスメト」のコースで取り上げられている論文を早朝に読んでいたのだが、いくつかハッとさせられるような指摘がそれらの中にあった。一つは能力測定に関する偽装問題である。

先ほど目を通していた論文の中では、特に性格類型テストに関する偽装問題について取り上げられていた。論文の焦点は、性格類型テストの結果と実際に発揮されるパフォーマンスとの関係と、性格類型テストを受ける際に偽りの回答をする問題に関するものだった。

結論から述べると、性格診断は確かに私たちの個性を明らかにし、能力の水平的な特性と種類を明らかにすることに関しては有益だが、パフォーマンスとの相関関係は極めて希薄であることが、複数の研究を俯瞰的に捉えるメタ分析から明らかになっている。

発達心理学の観点からしてみても、それは納得のいく話である。私たちのパフォーマンスは、性格類型のような水平的な分類に立脚していながらも、パフォーマンスの高低は、垂直的な特性に大きく基づいている。性格類型テストのようなタイプ論的アセスメントは、私たちが持つ知性や能力の種類を明らかにしてくれるのだが、結局のところ、知性や能力が持つ深さを捉えることはできない。この論点については、発達理論を学んだことのある人にとっては周知のことだろう。

その論文を読みながら私が面白いと思ったのは、別の箇所にある。それは、性格類型テストに関する自己を偽りながら回答することに関する論点だ。その論文の結論に興味深い指摘がなされていた。性格類型テストにおいて、被験者が自己を偽りながら回答することを避ける手段は今のところない。

ただし、そうした自己を偽れる能力というのも、組織環境や社会環境に適応するためには必要な能力なのではないか、という指摘がなされており、大変興味深い観点だと思った。論文の中でのその主張は、少しばかりあまのじゃく的なものに映るかもしれないが、そこには一定の真実があるように思えた。

被験者が、測定を受けるという環境に真に適応するとき、ありのままの自分をさらけ出すことは逆に純朴過ぎなのではないだろうか。真に環境適応能力を有しているのであれば、自己を偽りながらでも、測定が生み出す文脈に沿った形の自己をその場で発揮することができるように思うのだ。

自己を偽装するという言葉は響きは良くないかもしれないが、それは刻一刻と激しく変化する社会的な文脈に適応するという意味では、非常に大切な能力なのかもしれない。また、意識の発達という形而上学的な側面から捉えれば、そもそも人間が作り出す諸々の測定を受ける際に、真の自己と偽りの自己を区分することは意味をなさない。

測定というものが人の手によって構築され、社会的に構築されたものであるがゆえに、それによって映し出される自己は、全て真の自己だとも言えるし、全て偽りの自己だとも言えるのだ。測定によっ

© YOHEI KATO 2018

て明らかにされるものは自己の一部を映し出すものであるがゆえに、それを通じて真の自己を捉えることができるのと同時に、測定が映し出すのは自己の一部であるがゆえに、全体性を持つ真の自己から見ればそれらは全て偽りの自己だとも言える。

これはあらゆる測定手法に当てはまることだが、測定が内包する幻想と価値の両側面を絶えず把握しておかなければならない。その論文で記載されていたことは、性格類型テストのみならず、知性や能力の垂直的な段階を明らかにする発達測定に関しても当てはまる。

もちろん、信頼性の高い発達測定である場合、被験者が自己を偽って回答をしたとしても、それらの測定が発話内容以上に発話構造を分析するものであるがゆえに、自己偽装の影響が測定結果に色濃く反映されることはそれほどない。端的に述べてしまうと、垂直的な発達測定は自己偽装が極めて難しいのだ。多くの場合、自己を偽って回答をしたところで、垂直的な発達段階が高く測定されることはほとんどない。

ただし、それでも自己偽装によって測定結果が左右されてしまう可能性は常に残っている。しかし、発達段階を高く装うことによって、実際に評価結果が高度な段階を示したのであれば、それはその被験者に高度な段階を発揮することのできる潜在能力が備わっているという見方もできる。

高度な段階を装ったところで、高い段階を示すことがほとんどの人にとって困難であることを考えると、自己の形を変えながら測定という文脈に適応し、そこで高度な段階の特性を発揮できることは潜在的な能力の表れと見て取ることもできるのではないだろうか。

もちろん言うまでもなく、それらの測定が生み出す文脈と実際に能力を発揮する現場の文脈とが高い度合いで合致している必要があり、測定対象の能力がその測定手法で的確に計測することができるのかといった妥当性に加え、測定手法の信頼性が高度に担保されている必要がある。発達測定と自己偽装の関係については、今後も考えを深めていく必要がある論点だと思う。2017/4/22

969. 自己偽装と環境適応能力

早朝は曇り空であったが、しばらく仕事をすると小雨が降り出した。小雨を横目に仕事を進めていると、再び青空が戻ってきた。

書斎の窓から遠方を眺めると、南の方角に一筋の虹が見えた。私は、少し前に虹を発見したのと同じ場所に虹が架かっていたことを不思議に思っていた。そこは虹の通り道なのかもしれない。うっすらと姿を現した虹は、その瞬間の私の心情と合致していた。

私は再び、先ほど考えていた、自己偽装と発達測定について考えを巡らせていた。これは自分にとってかなり興味深い論点だったのだろうか、一つのまとまった文章を書いておいたにもかかわらず、再びこの論点が気になり始めたのだ。

先ほどの文書を執筆してから、さらに二つほど関連論文を読み進めたことも相まって、この論点についてまた少しばかり書き留めておきたいと思う。やはり測定にまつわる自己偽装の論点は、私たち人間というダイナミックシステムが持つ環境適応能力と切っても切り離せない関係にある。

読み進めていた論文で扱われている測定手法は、性格類型テストのように、何らかの項目を選択していく類のものが想定されている。そのため、文章を記述し、記述内容のみならず記述された内容の構造を分析していく発達測定とは性質を異にすることに注意をしなければならないが、性格類型テストを受ける場において、そのテストが自分のどのような能力の種類を明らかにするものなのかを理解し、そのテストが自分に求めている事柄が何なのかを明確に掴み取る力というのは、環境適応能力と密接に関係しているだろう。

性格類型テストを受けるという環境において、その環境が何を自分に突きつけ、何を自分に要求しているのかを把握できなければ、より複雑な組織環境や社会環境が突きつけてくる課題を適切に掴むことなど不可能なように思われる。ある意味、性格類型テストという環境の性質を捉え、それが要求する課題が何なのかを深く捉える時、純粋にありのままの自己を開示する形でそのテストと向き合うことなどできないのではないだろうか。

そこにはやはり、自己の形を変えながら環境に適応していく能力が必須となるだろう。先ほど読んでいた論文の中で指摘があったように、その環境で何が要求されているのかを識別する能力は、実際にパフォーマンスを発揮する環境におけるその人物の能力と強い関係があるのだ。

高度なパフォーマンスを発揮する人物というのは、与えられた環境の特性を掴み、その環境に柔軟に適応する中で自分の能力を発揮していくという特徴を持つ。こうした特徴は、アセスメントという環

© YOHEI KATO 2018

境の場においては、アセスメントで要求される事柄に応じて自己を柔軟に変化させていくという形で現れることになるだろう。

極端な見方をすれば、アセスメントで要求されるものが何なのかを把握することができず、そこで自己を変化させることができない者が、複雑な環境に適応しながら高いパフォーマンスを発揮することなどできないように思えるのだ。環境に適応する能力とパフォーマンスの関係については、今後も関心論点の一つとしておきたい。2017/4/22

970. 初校の再読

今日は朝から夕方にかけて、第二弾の書籍の初校を最初から最後まで一文ずつ読み続けていた。誤字・脱字等の細かな点を確認するという作業を延々と行っていた。当初の予定では、早朝に流し始めたマウリツィオ・ポリーニのベートーヴェンピアノソナタ全集が終わるまでに、この作業を完成させたいと思っていた。しかし、三時半を過ぎた段階でちょうど半分まで初校を読み進めることにとどまっている。

10時間弱にわたるピアノソナタ全32曲のうち、ついに第28番の第2楽章が静かに流れ始めた。そして、第2楽章の始まりと同時に、外の世界では雨が降り出した模様だ。

私は、自分の関心事項に合致した論文や書籍を読むことに関して、一切の苦などない。だが、それでも他者が執筆した文章を長時間読み続けることには限界がある。

いつも私が行っているのは、読むことと書くことを適宜織り交ぜながら、絶えず読み絶えず書くという生活を形作ることである。今朝から読み進めていたのは自分が執筆した文章であるがゆえに、他者が執筆したものよりも長時間読むことが可能なのだが、それでも読み続けるという行為には限界があるようだ。

本書の中でも言及しているが、実践にはやはり変動性を取り入れることが不可欠なのだ。同じような実践を無駄に長く行っていても意味はない。そこに変化を加え、実践に彩りを加えていくことが必要だ。初校の再読と修正は、どうしても本文を最初から最後まで地道に読み進めていくことが要求されるがゆえに、普段私が論文や書籍を読む際に行っているような工夫を取り入れがたい。そのた

め、今の私にできることは、このように文章を執筆するという休憩を挟むことであった。文章を読むという行為をひたすら継続させた後には、休憩のために文章を書くという行為が不可欠である。

逆に、文章を書くという行為をひたすら継続させた後には、休憩のために文章を読むという行為が私にとっては欠かせない。読むことと書くことの二つの変数だけで一日を形作れるというのは、極めて単純かつ質素な日々であるが、そうした慎ましい生活を送れることが何より幸福だ。

ピアノソナタ第28番が終わり、ポリーニのCDでは次の曲が第30番となっている。気づかないうちに第1楽章も終わり告げ、いよいよ冒頭から凄まじい勢いを見せる第2楽章に突入した。

そろそろ休憩を終え、再び初校を読み進めたいと思う。現在、全5章のうち、3章の真ん中まで来ている。何とか今日中に、全ての文章に目を通したいと思う。とても充実した土曜日であったと感じながら今日の就寝を迎えたい。2017/4/22

971. 初校の修正を終えて

今日は五時半に起床し、結局就寝前の十時近くまで仕事を行なっていた。土曜日のほぼ全ての時間を第二弾の初校の修正に当てたこともあり、今日一日で全ての作業を完成させることができた。

原稿の一文一文を全て最初から最後まで読み通すことは、非常に骨の折れる作業であったが、全てを無事にやり終えることができて充実感を感じる。全ての作業を終えて手を休めてみると、結局、10時間に及ぶベートーヴェンのピアノソナタを全曲聴くだけではなく、もうさらに5時間ほど聴いていたことに気づかされた。

今このようにして日記を書いている最中にもピアノ曲が流れ続けている。今日という一日ほどに、ベートーヴェンの作品に励ましを得ながら仕事を進めたことはないだろう。

ピアノソナタ全32曲という一つの音楽体系をベートーヴェンが創出してくれたことに対して、これ以上ないほどに感謝の念を持っている。実は今日の仕事の最中に、ベートーヴェンが残した交響曲や協奏曲を少しばかりかけてみたのだが、それらは自分の思考の音と流れに合致しなかった。

やはりベートーヴェンのピアノソナタには、自分を動かす何かがあるのだ。夕方の仕事を終え、入浴をしている最中にもベートーヴェンのピアノソナタを聴き続けていたのだが、それらが一つの体系として美を構築していることに改めて感動していた。

哲学者のイマニュエル・カントが建築的に哲学体系を打ち立てたのと同様に、ベートーヴェンも建築的に音楽体系を打ち立てていたのだ。私が美を感じていたのは、こうした建築的な様式美にあるのかもしれないと思わされた。

一日中自分が執筆した文章を読んでいたがゆえに、思考が少し錯綜しているかもしれないが、形式が美を生み出すということについてはより考えを深めていく必要があるだろう。そして、自分がそうした形式を構築し、そこから美を生み出すためにはどうしたらよいのかを考えていくことが求められる。

形式と美に関するこの課題を抱えながら、やはり私はこの夏にギリシャに行く必要があるのだろうか。もしかしたら必要なのかもしれない。この夏ではないにせよ、オランダにいる残りの期間において、必ずギリシャに足を運んでおく必要がある。同様の理由から、エジプトにも足を運ばなければならない。

これは自分にとって必然の訪問である。ギリシャとエジプトに対する小さな関心が芽生えてから、随分と時間が経った。もう少し、あと少し自分の内側が成熟したその時に、それらの二つの国に必ず訪れることになるだろう。

全ての仕事を終え、今朝の宣言通りに、今日はこれ以上にないほど充実した土曜日であったと言える。明日も同様の一日であることを祈りながら、就寝に向かいたい。2017/4/22

【追記】

この日記を執筆してから一年が経ち、この日記で書かれていることが実現されそうである。すなわち、ギリシャとエジプトに足を運ぶ日が刻一刻と迫ってきていることを感じているのだ。欧州でもう一年過ごすことをもたらしたものは、今確実に私をギリシャとエジプトに連れて行こうとしている。本当にその時がもうあと一歩のところまで迫っている。フローニンゲン：2018/5/9（水）21:10

© YOHEI KATO 2018

972. 対象からの脱却と接近

昨日、第二弾の書籍の初校を無事に修正することができた。最初から最後まで一文一文を確認していく作業は、非常に骨の折れるものであったが、自分が執筆した文章を読み返すというのは、他者が執筆した文章を読むのとはまた違った発見があるものである。

今回の原稿そのものは、昨年の年末に全て書き終えていたため、文章を執筆した時の私は半年近く前の私ということになる。その当時の自分がどのような思いで、どのようなことを考えながら文章を執筆していたのかを少しばかり回想していた。

書籍を執筆するというのは、そこで表現される内容から離れることを意味するのかもしれないとつくづく思う。これは第一弾の書籍の時も感じていたことだ。どちらの書籍も、人間の発達を取り上げたものであるため、執筆を通じて、そうした大きなテーマそのものから私が離れたという意味ではない。第一弾の書籍の執筆後に感じていたのは、ロバート・キーガンを含め、「意識の発達論者」と一括りにされる者たちの思想からの脱却現象である。

もちろん今もなお、キーガンを含め、日本で知られているウィルバー、クック=グロイター、トーバートから受けた影響が私の中から消え去ることはない。ただし、数年前のような形で彼らの理論や思想と向き合うことはもはや今の私にはできない。彼らの理論や思想を包摂するような形で文章を書くことは、いったんそれらから離れる儀式的な意味合いがあったのだ。それは、今回の第二弾の書籍に関しても同じかもしれない。

今回は、カート・フィッシャーの理論と思想を主題として取り上げた。フィッシャーの理論と思想は、非常に大きな体系として私の内側の思考空間に存在している。フィッシャーから私が受けた影響は、キーガンやウィルバーを凌ぐものであると言っても過言ではない。今回、フィッシャーの理論を真正面から取り上げることによって、やはりそこから離れることを可能にしたように思う。

以前の日記で言及したように、対象から離れるというのは否定的な意味合いを持つものではない。それよりもむしろ、対象から一度離れるというのは、対象のさらに奥に近づくために不可欠なものなのだ。

© YOHEI KATO 2018

今でも覚えているのは、原稿を全て執筆し、筆を置いた時、そこに書かれている内容から自分が脱却したのだという確かな感覚があったことである。書籍を執筆するというのは、私にとって、対象から離れるという儀式的な意味合いがあるのだと改めて感じた。

第二弾の書籍を書き終えた直後から、私の頭の中にはすでに第三弾と第四弾の書籍に関する構想が湧き上がっていた。いつからそれらに取り組むかは明確ではないが、また近々執筆を開始したいと思う。それらは、人間の発達をダイナミックシステム理論やダイナミックネットワーク理論の観点から捉えていくような書籍にしたい。おそらく今すぐに私がそれらの書籍の執筆に取り掛からないのは、それらから一度離れるという過程を踏むにはまだ早すぎるからだろう。

現在は、そこから離れるための前段階にある。対象との向かい方にもどうやら発達段階があるようだ。今はまだ対象の中に入っていく段階であり、離れるような段階では決してない。可能な限り対象に深く入った後に、脱却を促す知らせが届くだろう。

その通知を得た後に、脱却のプロセスを歩みたいと思う。それが次の段階である、対象からの脱却と対象の奥にある本質への接近を可能にするのだ。多くのものから脱却し、多くのものに接近していくというプロセスを、私は絶えず歩んでいかなければならない。2017/4/23

973. 音楽との向き合い方について

今日は早朝から、モーツァルトのピアノソナタを聴くことにした。モーツァルトが残したピアノソナタは全部で18曲あり、時間にして6時間半に及ぶ。

一昨日から昨日にかけて、ベートーヴェンのピアノソナタのみを延々と聴いていたためか、もしくは、今朝の感情と感覚の性質からか、今朝に限って言えば、ベートーヴェンのピアノソナタを選択することはなかった。

昨日、マウリツィオ・ポリーニとアルフレッド・ブレンデルが演奏した曲を長時間にわたって聴いていた。二人の異なるピアニストが演奏するベートーヴェンのピアノソナタを聴いていながらも、私が単純に仕事の伴奏としてそれらを聴いていたためだろうか、両者の違いを明確に掴むことが未だにできていない。

対象に集中し、真剣に演奏を聴くということがなければ何も見えてこないのだ、ということを改めて知る。ただし、対象と真剣に向き合うためのヒントのような現象と昨日出会うことができた。それは、確かに10時間に及ぶピアノソナタを聴き流していながらも、時折、聴き流すことでは済まされないような演奏があったことだ。つまり、時に私の手を無条件に止め、その曲に私を引き込んでしまうような演奏があったということである。

私がその曲自体に引き込まれたのか、そのピアニストの演奏に引き込まれたのかの違いによって、その曲が持つ力とその演奏が持つ力が明らかになると思ったのだ。昨日において、思わず手を止めずにはいられなかったのは、ポリーニが演奏するピアノソナタ第17番だったように思う。特に、同曲の第2楽章だったと記憶している。ポリーニにせよ、ブレンデルにせよ、私が聞いていたのは音楽配信サイトから流れるCDに収録された演奏である。

本来演奏とは、人間と同じダイナミックシステムであり、様々な要因との相互作用によって、常にその姿を変えるものである。しかし、CDの演奏曲から聴こえてくる音は、それが録音された時の演奏者のダイナミックな感情や感覚が織り込まれているのは確かだが、それらがCDに収録された時点でそれは不変なものになる。

変化するのは、私たち聴き手の感情や感覚である。そうしたこともあり、その日、その瞬間に自分を捉えてやまない演奏は変化する。それは必然だろう。そうしたことからおそらく私がするべきことは、その日、その瞬間に自分を掴んで離さない演奏と真剣に向き合うことにあるのだと思う。そうしたことをしなければ、その曲や演奏が私にもたらす意味を掴めないどころか、結局自分という存在がわからないままになってしまうだろう。

今日はそのことに意識を向け、思わず仕事の手を止めざるをえない力を持つ曲や演奏と出会うことができたら、迷うことなく仕事の手を休め、その曲に聴き入りたいと思う。対象に深く没入し、そこから再び浮上するという繰り返しが持つ重要性は、音楽との向かい方においても変わることがない。
2017/4/23

© YOHEI KATO 2018

974. 日記が持つ秘術と顕術

──あなたは日記をつけていますか？──ラルフ・ワルド・エマーソンからヘンリー・デイヴィッド・ソローへ

早朝から日記を書き続けている。昨日は、午前中の数時間を除き、残る時間は全て、自分が執筆した書籍の初校を読み続けていたのであるから、文章を書きたいという衝動が湧き上がるのも無理はないのかもしれない。

昨日もいつもと変わらないほどの量の日記を書き残していたように思うのだが、今朝は無性に日記を書き留めておきたいという力が私の背中を押している。書籍を執筆することを通じて学ばされたことは数かぎりない。その中でも、書籍が持つ形式でしか伝えられないことと書籍という形式では伝えられないことの双方があることに気づかされる。特に、一般に流通する書籍を出版する場合、多くの人に理解してもらえるような内容と文章表現にしていく必要があるのはいうまでもない。

前回の作品に続き、今回の作品においても、その点を絶えず意識しながら文章を執筆することによって多くの気づきがあった。多くの人に理解してもらえるような内容を取り上げ、さらにそれらを分かりやすい文章にしていく作業を通じて、執筆者である私自身の対象に対する理解がより明瞭になり、自分の中で理解がさらに進んだことは間違いない。

一方で、一般に流通される書籍の形式では語ることのできない内容と表現方法があることも、歴然として痛感させられた。やはり私にとっては、書籍の形式を通じて表現できない内容と方法を代替するものが日記という形式なのだ、ということに改めて気付かされた。

もちろん日記のみならず、学術論文という形式もわたしにとって非常に重要な表現手段である。それら三つは、表現方法が異なり、必然的にそこで表現される内容も姿を変えることになる。今の私の中で最優先されるべきものは学術論文の執筆だと思うが、それでも日記を執筆し続け、書籍を執筆するということも絶えず継続させていきたい。それら全ては、開示されるものが全く異なるからだ。

開示されるものの相違が一つに収斂される日が来るまで、それら三つの表現形式で言葉を形にすることを続けたい。

© YOHEI KATO 2018

昨日もふと、日記の持つ意義について改めて考えていた。そのきっかけを生んだのは、米国の思想家ラルフ・ワルド・エマーソンの何気ない言葉だった。

エマーソンが弟子でもあり友でもあったヘンリー・デイヴィッド・ソローに対して、「あなたは日記をつけていますか？」と尋ねたエピソードが脳裏をよぎったのだ。ソローは、この問いかけをきっかけとして日記の持つ意味に目覚め、実際に日記を書き始めた。そして、ソローが一生涯にわたって随筆を執筆し続けることができた背景には、日記を書き続けたことが大きく関係していた、という史実が残されている。ソローは絶えず日記を書くことを通じて、随筆を書き続けたのだ。

このエピソードから、私は改めて、日記には内側の流れを循環させるような作用があるに違いないと思うようになった。そして、日記を執筆することは、内側の循環の流れを促すのみならず、内側から何かを外側に創造するための力を呼び覚ます作用があるに違いないのだ。

これは疑いようのない事実として日々の私に経験されている。ソローに対して問いかけを投げかけたエマーソン自身、生涯にわたって日記を書き続けていた。

思想家でもあったエマーソンが書き残した日記は、一つの文学作品として今もなお多くの人に読まれ続けている。エマーソンにせよ、ソローにせよ、そして森有正先生や辻邦生先生のように、自分の内側にある固有の現象を外側に表現することによって、普遍的なものに昇華させていくことを希求した人物たちは、例外なく日記を書き続けていた。

日記を執筆することは、固有性と普遍性を架橋する唯一の媒体手段なのかもしれない、と思わずにはいられない。現在の私は、固有性を普遍性に昇華させていくことの前段階、もしくは前々段階にあり、日記という表現手段に没入している状態だ。つまり、普遍的なものに至るために日記を執筆しているわけではないのだ。自分の内側にある思念や感覚を言葉にしなければ日々を生きていけないがゆえに、日記を書き残しているにすぎない。

彼らのような偉人が日記と向き合ったような形で、私は日記という表現手段と向き合えていないことを知っている。だが、それでも日記を書くことを私は辞めないだろう。日記という表現手段は、内側の循環を促し、内側からの創造を呼び覚ます力を持っていることを知ってしまったからだ。2017/4/23

© YOHEI KATO 2018

【追記】

大きな偶然に驚いている。ちょうど今しがた、日記について考えを巡らせていた。その瞬間の考えとこの日記で書かれていることは大いに重なる部分もあるが、当時の私とは異なる考えが先ほどの自分の中に芽生えていたことにも気づく。上記の日記で述べられているように、表現方法が異なれば開示される真実というものは確かに変わる。だが、先ほど自分が考えていたことは、もはやそれらの複数の真実を日記という表現形式を用いて形にすることが可能だということだった。

「あなたは日記をつけていますか？」というエマーソンからソローへの問い。なんてシンプルでなんと深い問いだろうか。自らの人生を綴れない人間に、どうやって自らの人生を生きることができるだろうか。また、自らの人生を生きることができない人間に、どうして他者の人生を引き受けることができるだろうか。他者の人生を引き受けることができない人間に、どうやってこの世界への真の関与が成し遂げられるだろうか。

「夕暮れ時に見た赤紫に色に輝く夕焼け空を誰かと共有したかった」その一文の中に、一人の人間の人生の全てが溢れ出す。その一文を書き、それを共有するために今日までの自分の人生があり、今日という一日があったのだと知る。フローニンゲン：2018/5/9（水）21:29

975. 全体美と建築美

一昨日、昨日とベートーヴェンのピアノソナタだけを聴き続け、今日は打って変わって、モーツァルトのピアノソナタだけを聴き続けている。二人の偉大な作曲家の音楽を一日中聴き続けることによって、私の聴覚が麻痺し始めたのかもしれないが、今朝、ふとした気づきを得た。

モーツァルトのピアノソナタには、人間が固有に持つ作為性が感じられないのだ・・・。これらの楽曲のイメージはどこから生まれ、果たしてこれらは意思を持つ人間が生み出したものなのか、という感覚にぶつかった。

モーツァルトが活躍したウィーン、そしてモーツァルトが生誕したザルツブルグを訪れた時、私は自分の中で奇妙なことが起こっていることに気づいた。結局、モーツァルトにまつわる記念館と博物館を複数訪れ、関連書籍を数冊ほど購入したにもかかわらず、モーツァルトという人間が自分から遠

ざかっていったのである。それはモーツァルトを敬遠するということではない。実際に、今この瞬間の私はモーツァルトのピアノソナタを聴いている。

モーツァルトが自分から遠ざかっているというのは、モーツァルトという音楽家が掴みどころのない存在として私の中で立ち現れているということだ。これは私がウィーンやザルツブルグで感じていた、モーツァルトは物理的に地上界で生活をしながらも、精神的には天上界に生きていた人間だったのだ、という感覚と関係しているだろう。

今聴いているピアノソナタに限って言えば、モーツァルトが音楽にしたものは、どこか人間の匂いがしないのはそのためかもしれない。人間に固有の作為性が感じられないというのは、そのことに起因している気がしてならない。

モーツァルトのピアノソナタに少しばかり耳を傾けていると、ベートーヴェンのピアノソナタのような建築美とは異った美がそこに顕現されていることに気づかされる。もちろん、モーツァルトも音楽理論に基づいて作曲をしていったのだろうが、一歩一歩曲を構築していったという感じが一切しないのだ。曲の最初から最後までが、すでにそこにあった感じがするのである。もしかすると、これは音楽のイデアのようなものと関係しているのかもしれない。

ベートーヴェンのように、透徹した意思を持って部分を積み重ね、それらの部分が一つの全体を構成した瞬間に、部分の単純総和を超えるような音楽を築き上げていったのではなく、モーツァルトの音楽は、部分の総和を超えるような全体が最初からモーツァルトの中にあり、それが楽曲として外側に現れたのではないかと思わずにはいられない。

先ほど私が聴いていた曲にも、そして今この瞬間に私が聴いている曲にも、最初からそこにあったと言わんばかりの全体感で満たされている。それがこのような、音楽のイデアが純粋に顕現したような美を放つモーツァルトの曲であるに違いない。

一昨日から昨日の二日間にかけて聴いていたベートーヴェンが作り出した美は、モーツァルトのそれとはやはり異なる。ベートーヴェンは、一つ一つの音を透徹した意思で建築していくような人であったように思うのだ。彼のピアノソナタ全曲を作曲順に聴いていくと、そこには、人間の作為性が純化

© YOHEI KATO 2018

されていく過程を見て取ることができるかのようだ。人間に固有の作為性が透徹した意思によって純化された結果が、あの一連のピアノソナタなのであり、そこに宿る建築美なのだ。

モーツァルトがもたらす全体美にも私を惹きつけてやまないものがあるが、ベートーヴェンがもたらす建築美の方に今の私をより強く惹きつけてやまないものがある。この美の正体とその生成方法をより探究していきたい。2017/4/23

976. 初めての作曲体験を通じて

今日は、久しぶりに日曜日らしい過ごし方をした。学術論文や専門書をほとんど読まない日曜日などこれまであっただろうか。

今日は午後から、5時間ほど作曲活動に没頭していた。過去に一度挫折をしているだけに、今回は曲を作ることをまずは純粋に楽しみながら作曲に取り組みたいと思う。

音楽的な知識が皆無であり、ウェブサイトの情報だけを頼りに、作曲ソフトを活用してなんとか30秒ほどのピアノ曲を一曲作ってみた。5時間の時間の中であれこれ調べ物をしていたとはいえ、午後から夕食までの時間を使っても、結局30秒ほどの曲を一つ作ることで精一杯であった。

「曲」という呼び方をしたが、おそらくこれは曲と言えるような代物ではないだろう。自然言語でいう文法に該当するであろう音楽理論のない私が作った音の総体は、曲と呼べるのか定かではない。なんとか不快に聞こえない程度の音の塊ができたに過ぎない。だが、とにかく一曲作ってみることによって、様々な学びがあった。

当初の私が作りたいとイメージしていた曲は、壮麗な流れを持つものだったが、結局、陰鬱な雰囲気を漂わせる曲ができあがった。ただし、興味深かったのは、作曲を作るプロセスと文章を作るプロセスが酷似していることだった。具体的には、最初の音やメロディーが生まれ始めると、それは最後のあるべき形に向かって自発的に動き始めるのだ。今回私が作ったものには主題などという大それたものはないのだが、仮にそうした主題のようなものがあれば、それは然るべき展開手順を終えって曲の最後に向かうはずだ、ということが何となくわかった。

さらに、作曲をしている最中の感覚を書き留めておくと、この音がきたら次の音はこのように動かざるをえないというような感覚が絶えずあり、それはある程度の幅を持つ時もあれば、次の音は一つしかないというような時もあった。幅の範囲内で音を探したり、次の音が一つしかありえない場合はその音を探すようなことが続いた。範囲から少しでも逸脱したり、次の音が一つしかありえないはずなのにそれとは違う音を楽譜に打ち込むと、実際に奏でられる音が非常に不快なものに聞こえるのだ。これは興味深いことであった。

とにかく音をパズルのように組み合わせながら、少しずつを曲を形にしていった。そのような作業を5時間ほど続けたところで、入浴をすることにした。すると、頭の中が自然言語が一切介入しないような音楽言語だけの世界になっていることに気づいたのだ。これも今まで経験したことのないような体験であった。文字通り、頭の中が音楽で満たされるような感覚なのだ。

この感覚を自然言語における体験に置き換えると、それは外国語を習い始めた時、その言語に長時間浸った後の状態と形容していいかもしれない。その時には母国語が混入する隙間はなく、思考の一切がその外国語で満たされる感覚だ。作曲を通じて、そのような体験を音楽言語ですることになるとは思ってもみなかった。

音楽言語を外側から学ぶのではなく、実際に音楽言語を活用し、音楽言語の中に入り込むということを通して、自然言語に対してまた新たな洞察を得られるような気がしている。今の私が行っていることは、作曲と呼べるような代物ではなく、発話文法を知らずに文字を適当に並べ、なんとか文章の体裁をなすように文字を組み合わせていることに過ぎない。

英語やオランダ語を習い始めた頃と同様に、最低限の文法のようなものを学んでいく必要があるだろう。もしくは、母国語を習得した時のように、文法のような規則を頭を通じて学ぶのではなく、身体を通じて自然と学ぶ方が良いのかもしれない。

今はとにかく、実際に曲を作るという実践を通じて、自分なりに作曲の法則性を掴む試みに重点を置き、その合間合間に少しずつ最低限の音楽知識を学ぶようにしている。現在、シンガポール国立大学が提供する、作曲に関するMOOCを受講しているのだが、そこで用いられている英語が果たして英語なのかと思われるぐらい、音楽用語だけで構成されている。

© YOHEI KATO 2018

また別の新しい言語を学んでいるという意識でこの講座を少しずつ進めていきたいと思う。繰り返しになるが、まずは実際に曲を作っていくという実践を最優先にし、自分の内側にあるものを曲として外側に表現していくことを純粋に楽しむことを心掛けたい。2017/4/23

【追記】

この日記で述べているように、作曲を一つの外国語を学ぶように身体感覚から学んでいくことはとても大切だと思われる。作曲をするためには、音楽理論という音楽の文法を学ぶ必要があるが、それを単純に理論書を通して学ぶよりも、実際に外国部を話してみたり、書いたりして学ぶのと同様に、実際に曲を作っていく過程で文法を学んでいくことが何よりも大切なように思われる。今の私は、とにかく曲を作ることを最優先にし、正直なところ、しばらく作曲に関する理論書を読んでいない。それぐらいに、実際の体験とその省察を経て学びを深めていくことが何より大切なのだと改めて実感する。フローニンゲン:2018/5/9(水)21:42

977. 感覚の鋭敏化と脳の再構成をもたらす作曲

昨日は、午後から夜にかけてピアノ曲の作曲に取り組んでおり、普段と異なる活動に従事していたためか、昨夜の夢も印象的なものであった。スイスの山脈を彷彿とさせるような場所に、列車が走る線路が複数あった。山を切り開く形で複数の線路が走っており、私はそれほどまでに数の多い線路を見たことがなかった。さらに、それらの線路には高低差があり、対向車線の組み合わせが山の高さに応じていくつもあるようなイメージである。

それらの線路を走る列車は、決して現代的なものではなく、近現代のヨーロッパの時代を彷彿させるような列車であった。赤と黒に塗られた列車が煙を出しながら走る姿を、私は上空から眺めていた。その後、夢の場面が変わり、オランダの街でよく見かけるレンガ造りの家々が隣り合わせになったような居住地にある、一軒の家の中に私はいた。その家の入り口の造りが不可解であり、梯子がなければ入り口から出入りすることができない。

家の入り口が地面から数メートルほどの高さのところにあり、家に入る時は特に梯子が必要だ。そのような変わった造りの家の中にいた私は、用事があるために外出せねばならず、少し急いでいたた

めか、家の入り口の地面に向かって壁を伝うようにしてするりするりと降りていった。それらの印象的なシンボルを持つ夢を昨夜見た。

起床直後、昨日の作曲体験についてまた少し回想していた。自分が思い描くメロディーをもとに、音をあれこれ組み合わせることに数時間ほど没頭した後、ハイドンやベートーヴェンが作曲したピアノを何気なく聞いていた。すると、それらの曲を聴いている私の内側に妙な違和感があった。おそらく、音楽理論無しに曲を作ろうとし、曲が形になるまで繰り返しぎこちない音の組み合わせを聴いていたためか、自分の耳が不協和音に調律され、本来調和の取れたハイドンやベートーヴェンのピアノ曲がとても歪な音の組み合わせのように聞こえてきたのだ。

この現象はしばらく続き、ベートーヴェンの曲を長く聴いていると再び自分の耳の感覚が元に戻った。その時に考えていたのは、これは耳の感覚のみならず、私の脳自体が、二つの対極にある異質なものをどのように認識・処理すればいいのかを迷っているようだった。つまり、私の脳が不協和音と協和音の間で揺れ、両者のどちらに調律すればいいのかに対して右往左往している姿を見て取ったのだ。この体験は一見すると否定的に思えるが、実はそうではないことが少しずつ明らかになってきた。

作曲という活動は、音を注意深く聞くことを私に要求してきた。音を注意深く聞き続けるということを数時間行ったことにより、音を聞く感覚が研ぎ澄まさせれるような体感があったのだ。そうした感覚が研ぎ澄まされたことによって、ハイドンやベートーヴェンが産み出した調和の取れたピアノ曲が奏でる音が、逆に、鋭利な刃物のように身体に切りかかってくる感覚がしたのである。

身体全身というよりも、特に脳内の神経細胞をつなぐ余分なシナプスが刈り取られていくような感覚があったと述べた方が正確だろう。自分の脳内に、これほどまでに不必要なシナプスが存在していることにも気づかされたし、また、余分なシナプスが刈り取られることによって、脳の神経細胞が再構成されたような感覚になった。

もしかすると、音と真剣に向き合う作曲という行為は、自分にとって、脳内の余分なシナプスを剪定し、脳全体を再構成するような作用をもたらすのではないかと思った。本来であれば作曲も日々の一つの習慣としたいのだが、まだそこには至らない。

© YOHEI KATO 2018

今日から再び、読むことと書くことの日々が続くことになるが、今週末にまた作曲を行い、そこでどのような発見があるかを楽しみとしたい。2017/4/24

【追記】

この日記で述べられている体験は非常に興味深い。それは、この日記を書いた当人ですらも忘れていたような体験だった。まさにこの日記で指摘されているように、作曲を通じて自分の内側で様々なものが再構成されていくのを日々実感するようになっている。音楽というものが元来、この世界に調和をもたらす役割を担っていたことを考えると、音楽には内在的に調和を創造する力があり、作曲実践は自己の内側に調和を生み出す働きをしていることがわかる。作曲実践を通じて、自分の脳だけではなく、心も身体にも調和がもたらされ、自分の人生そのものにも調和がもたらされているのを日々感じる。フローニンゲン:2018/5/9(水)21:52

978. 楽曲に潜む反復と差異

昼食を摂っている最中、ここ最近得られる気づきや発見が、これまでのものと自発的かつ有機的につながることが極めて多いということに驚いていた。先ほどもそのような驚きの瞬間に出くわした。

今朝から再び、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”を読み始めた。この書籍は、タイトル通り、差異と反復という現象を考察するものである。今朝本書を読み、午前中の外出を経て、昼食時に再び昨日の作曲について考えが及んでいた時に、突如として、差異と反復という現象は作曲において極めて重要な鍵を握ることに気づいたのだ。

昨日、作曲をしながらとても不思議に思っていたのは、仮に一つの小節内の音符の配列と次の小節内の音符の配列が全く同じであったとしても、それぞれが持つ意味が全く違うということであった。つまり、全く同じ反復に見えても、そこには差異が潜んでいるのだ。

言い換えると、反復の中には常に差異があり、反復によって差異が生まれ、差異によって再び新たな反復が生まれるのではないか、ということである。作曲に関するウェブサイトをあれこれと調べていると、曲を生み出していく鍵は、差異に着目するというよりも、反復に着目し、反復の連続性の中でいかに差異を作り出していくかにあるのではないか、ということに気づいた。

ドゥルーズの書籍の中に書き込んだメモを見ると、反復性というのはダイナミックシステムの核にある概念であり、ダイナミックシステムは絶えず自発的に反復運動を行いながら差異を生み出していく、ということが記されている。まさに、楽曲というのも一つのダイナミックシステムなのだ。それは単純に、演奏者の精神状態や感情状態、演奏環境によって楽曲の音色が変わるという意味でそのように述べているわけではない。

ダイナミックシステムの核にある反復性と差異性を備えているがゆえに、楽曲はダイナミックシステムなのである。さらに書き込みの続きを見返してみると、楽曲には自己組織化（self-organization）の作用が絶えず働いている、というメモが残されている。繰り返しになるが、一つの反復が別の反復を引き起こし、その反復が差異を引き起こし、その一つの差異が別の差異や反復を外部からの強制力なしに自発的に生み出していく姿は、自己組織化に他ならないだろう。

音楽を通じてダイナミックシステムの特性を捉え直すこと、ダイナミックシステムの特性から音楽を捉え直すことは、私に多くのことを教えてくれる。本書の序章でドゥルーズが言及しているように、科学と芸術から哲学を捉え直し、哲学から科学と芸術を捉え直すという営みは、今の私にとって非常に大切な実践のように思われる。

一つの楽曲を構成するためには、反復と差異が不可欠であり、楽曲が本質的にダイナミックシステムであるならば、私がこれまで探究してきたダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法と観点は、楽曲の研究と創出に非常に有益であると改めて思った。特に、反復の構造上の差異を明らかにする「再帰定量化解析（RQA）」は優れた手法であると瞬間的に閃く。

一年目のプログラムが終了する六月の中旬から、楽曲の反復と差異の構造を分析する研究に本格的に着手したいと思う。この研究を通じて、楽曲の発達過程を捉えるのみならず、そこから人間の発達現象に関する新たな洞察を得たいと思う。2017/4/24

979. 自己としてのベートーヴェン

数日前の金曜日と土曜日は、一日中ベートーヴェンのピアノソナタを聴いていた。昨日はモーツァルトのピアノソナタを聴いていたのだが、結局今日もベートーヴェンのピアノソナタを聴きたくなる自分がいた。実際には、起床直後にSpotifyを立ち上げた後、ドビュッシーのピアノ曲を一時間ほど聴

いていた。しかしながら、その時の私には、自分の内側の感覚がドビュッシーの曲と足並みを揃えて進行していくような気がしなかった。そのため結局、ベートーヴェンのピアノソナタに戻ってくる自分がいたのだ。もちろん、ベートーヴェンのピアノソナタも全部で32曲あるため、それらの全てがその瞬間の自分の感覚と完全に合致するわけでは当然ない。

だが、一つ言えることは、それら全ての曲を一つの音楽体系だとみなせば、32曲のピアノ曲が生み出す全体感としての一つの体系は、現在の私の内側の感覚といついかなる時も完全に合致しているという感覚がある。

これまでは作曲家としてのベートーヴェンを他者として捉えていたが、ウィーンでベートーヴェンの記念館を訪れて以降、もはやベートーヴェンが他人ではなくなった。ベートーヴェンが遺書を書き残した「ハイリゲンシュタットの遺書の家」の中庭で体験した、あの不可解でもあり不思議な体験以降、ベートーヴェンがもはや他者ではなく、自己と同一の存在であるとみなすようになっている。そうしたこともあり、知らず知らずベートーヴェンの曲に自分が引き込まれていくのだろう。

これからしばらくは、ベートーヴェンを中心に曲を聴いていきたいと思う。もちろんこれは、他の作曲家の曲を全く聴かないということを意味しない。しかし、私がベートーヴェンの曲をより深く理解するためには、彼の曲に絞って聴くという意思が必要なのだ。

私たちは、自分の声を意識して聞かなければ、自分の声が何たるかを知ることはできない。それは外側の声に当てはまるだけではなく、内側の声にも当てはまる。私たちは、自分たちの声を注意深く聞かなければ、それが私たちに訴えかける本当の意味を聞き取ることなどできないのだ。

今の私にとって、ベートーヴェンがもはや他者ではなく、自己と合致する存在になったのであれば、なおさら彼が残した曲を注意深く聴いていく必要があるだろう。なぜなら、ベートーヴェンの音楽は自分の声に等しいからだ。ベートーヴェンの音楽を注意深く聴くことによって、私は自分の新たな声を発見できるような気がしてならない。2017/4/24

© YOHEI KATO 2018

980. 第二弾の書籍に持たせた一つの役割：日本で普及しつつある「意識の発達理論」の盲点と幻想

先ほど夕食を摂りながら、今回の第二弾の書籍に込めた意図について思いを巡らせていた。書籍を執筆する際には、著者の中に必ず何かしらの主題があり、表現したいものがある。前回の作品においても私なりの主題があり、主題を持つというのは今回の作品においても同じである。改めて今回の作品に込めた想いが何であったのかを振り返っていた。

今回の作品は、前作以上に主張したいことや伝えたいことが多岐にわたっているのだが、一つには、現在日本で普及し始めている成人発達理論を取り巻く動向に対して警鐘を鳴らすような意図があったように思う。

ロバート・キーガンの書籍『なぜ人と組織は変われないのか』が翻訳出版されたのは、2013年のことであり、今から4年前に該当する。また、成人発達理論に関するその他書籍としては、2016年のほぼ同時期に『行動探求』と拙書『なぜ部下とうまくいかないのか』が出版されている。成人発達理論を取り巻く日本の動向を眺めた時、それが認知され始めたのはまだ4年前のことであり、直近に出版された二冊に至っては昨年に世に出されたものである。成人発達理論は日本において導入の黎明期にあることは間違い無いだろう。

そうした中、私は今回の作品を通じて、日本で普及しつつある成人発達理論の盲点を指摘するような試みをしようとしていた。人間の発達のみならず、理論や思想の発達において、対極的なものを取り入れることは非常に大事である。日本で普及し始めた成人発達理論に欠けている観点、あるいはそれとは対極的にある発想を紹介することによって、これから成人発達理論が日本で健全に発達していく土壌のようなものを今回の作品を通じて提供したかった。

現在、日本で広まりつつある成人発達理論の盲点は、実際のところ多くの論点に及ぶのだが、一つ取り上げるとすれば、「意識の発達」という現象を過大に解釈してしまっていることである。上記で紹介した書籍の著者であるキーガン、トーバートを始め、日本でも知られているアメリカの思想家ケン・ウィルバーの発達理論は、基本的には「意識の発達」という括りで紹介されることが多い。

彼らが主に対象としている発達領域は、自己認識や他者認識を司る領域であるにもかかわらず、現在の日本で見受けられる誤解は、意識の発達が高度化されれば、様々な能力──例えば「実務能力」──が向上するのではないか、というものである。これは大きな誤解であり、幻想である。意識の発達と個別具体的な能力の発達との間に、強い相関関係があることを示す実証結果は今のところ存在しない。

第一弾の作品の中でも紹介したように、キーガン、トーバート、ウィルバーたちが提唱するところの意識の発達段階というのは、建物のどの階層にいるのかを示すものである。確かに、建物の階層が上がれば上がるほど、そこから眺めることのできる範囲は拡大する。その結果、自己や他者、そして取り巻く環境などをより俯瞰的に捉えることを可能にするのは確かだ。その重要性は否定されるべきものではない。

しかし、現実世界において重要なのはそれだけではないだろう。建物のどの階層から世界を眺めるかだけではなく、その階層で世界と具体的にどのように関与するかが等しく大事なのだ。例えば、ある人物が発達段階4という4階のフロアから世界を眺めている際に、その場所で世界を眺めることだけには意味はなく、4階というフロアの中で具体的にどのような実践活動を営み、そのフロア内でどのような個別具体的な能力を発揮するかが等しく重要なのだ。

単に世界をある階層から眺めることは、世界への真の関与とは言えない。実際にその階層の中で具体的な活動に従事し、具体的な能力を発揮しながら世界と関わっていくことが、世界への真の関与なのではないだろうか。

現在、日本で広まりつつある成人発達理論には、とりわけ個別具体的な文脈において発揮される能力に対する発想が非常に希薄なのだ。その結果として、意識の発達段階が高まれば、個別具体的な能力が高まるのではないか、という淡い期待を強く醸成することになってしまっている。

日本で普及しつつある成人発達理論が抱えるこのような盲点に対して、第二弾の作品の中で主に取り上げるカート・フィッシャーの発達理論は対極的な発想を私たちに提示してくれる。ここではフィッシャーの理論を詳しく説明することを控えるが、彼の理論はまさに、個別具体的な文脈において培

われる能力の重要性を指摘するものであり、そうした能力がどのように発達していくのかを明らかにするものである。

今回の作品を通じて、現在広まりつつある成人発達理論に欠落している観点を紹介すると共に、建設的な批判を加えようとした背景には、冒頭で述べたように、日本の社会の中で成人発達理論が健全に発達していくためには、対極的なものを絶えず取り入れ、それらをぶつけ合いながら両者を成熟させていく必要があると思ったからである。2017/4/24

© YOHEI KATO 2018